

ふるさとで畜産をー

2人の「さ」とつたかとさん

将来は飯館村で畜産をなりわいとして、自分の意志で、その未来を目指し、一歩一歩、歩を進めている若者がいます。今回紹介するのは奇しくも2人の「さ」とつたかとさん。震災によりふるさとを離れて育った2人の「なりわいのリレー」を取材しました。



天斗さんがアルバイトで働く北海道北広島市の坪田牧場。卒業後は従業員として働きます。

佐藤隆人さん（飯桶町）

この春、北海道江別市の酪農学園大学を卒業する天斗さん。アルバイトをしている牧場でさらに1年従業員として働き、村に戻って牛農家を引き継ぎたいと考えています。「じいちゃんの仕事を継ぐと決めたのは幼い頃。震災で村を離れることになり、再び目指し始めたのは高校入学後でした」。

「もう一度べこやちえんだ」と語っていた祖父・細川義孝さんを令和元年に亡くし、伯母の細川恵美さんが牛舎を再建。そのバトンが次の世代

へ受け継がれようとしています。

「村を離れたくなかった」と振り返る避難。大阪で半年程を過ごし北海道江別市に転居。「じいちゃん達には年に1、2回しか会えなくなかった」。しかし、牛の仕事を継ぐ夢は心の奥に息づいていました。「村は自分が落ち着く場所」。

「もう1年、今度は従業員として働き仕事を覚えたい。村に戻ってもまずは仕事に慣れることから。いずれは頭数を増やし、将来的には肥育にも挑戦してみたい」。



大学の循環農学部畜産学コースで学びました。「牛は愛情をかけて育てた分、成長する。牛の行動の意味を読み解くのも面白いし、かわいいですね」。動物好きの天斗さん。冬の作業も苦にならないそう。



祖父・細川義孝さんの遺志を継ぎ小学校教諭の前職を辞して牛農家になった伯母の細川恵美さん(右)。「天斗がいるから安心して牛の仕事に取り組んでいます」。左は祖母の恵美子さん。



「牛を継ぐように言われたことは一度もない」そう。自分で決めて行動することが佐藤家の基本。大学では「畜産をやろうとしている同世代とつながりが持てたらうれしい」。



祖父母(右の2人・隆男さんとたつよさん)、両親(左端が父・豊洋さん)、伯父が働く牧場。震災後は繁殖を中心に行っています。母牛と経産牛、合わせて約300頭を飼養。

佐藤隆人さん（飯桶町）

福島明成高校を卒業し、4月から酪農学園大学に進学する隆人さん。昨年は県を代表し「第74回日本学校農業クラブ東北連盟大会」で意見発表を行うなど活躍の1年になりました。意見発表の内容を深め「第51回毎日農業記録賞」(毎日新聞社主催)にも応募。高校生部門で上位7人の全国表彰を受けました。また、福島民友新聞の新春企画「環境座談会」で他校の生徒と共に内堀雅雄知事との意見交換に臨んだり、2月には福島

市で開催されたイベントに招かれ特別発表を行ったり。「いろいろなチャレンジができました」。

「頭数が多くても親父はきちんと牛を見ている。経営のことも考え、新しいことをどんどんやろうとしている」と父・豊洋さんを尊敬。将来的には飯館で、ままだいな牛づくりを目指します。「心を込めた飼養管理ができる人になりたい。いい牛をつくることで、飯館を福島をもっと多くの人に知ってもらいたい」。



北海道江別市にある酪農学園大学。他大学も進路の候補にありましたが、家業と近い環境でより実践的な学びができる同校への進学を決めました。偶然にも、天斗さん(P6)の後輩になります。

